



Title	カルチュラル・スタディーズの理論と実践(1) 序言
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2001, 2000
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77290
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序 言

カルチュラル・スタディーズは、第2次世界大戦後間もない時期のイギリスにおいて、レイモンド・ウィリアムズなどにより「創始」されたとされるが、その後スチュアート・ホールを中心とする1970年代のバーミンガムにおける展開を経て、1980年代以降はアメリカをはじめとする英語圏に飛び火し、そして現在ではアジアを含めた世界諸地域に浸透しつつある分野である。

この論集は、大阪大学言語文化部・言語文化研究科の教官および大学院生をおもなメンバーとして1996年に活動を開始したカルチュラル・スタディーズの研究会CSC (Cultural Studies Circle) を母胎としている。しかし、「カルチュラル・スタディーズの理論と実践」というタイトルには、執筆者たちにもいささかの抵抗感がないではなかった。というのも、カルチュラル・スタディーズにおける理論構築はそれ自体が実践であり、また、理論から自由な実践活動や実践的分析というものもあり得ないことを踏まえれば、理論「と」実践という二分法的な表現は誤解を招くものかもしれないからだ。

また今回の論集は、「コミュニティ形成における諸問題」「現代メディアと文化」「先住民文化とポストコロニアル文学」という三部構成を取ったが、いうまでもなく、これらの問題設定でカルチュラル・スタディーズの関心が網羅されているわけではないし、また逆に、これらの問題がそれぞれに独立して存在しているわけでもない。むしろ論集全体を通じて、それぞれの執筆者による思索や分析がずれ合いもつれ合いながら、カルチュラル・スタディーズにおける「理論と実践」の関係を模索しているさまを感じとってもらえたら幸いである。